

令和5年度病虫害発生予報 第2号（6月予報）の送付について

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水稻	トビイロウンカ	平年並	やや多い
カキ	カキノヘタムシガ	やや早い	平年並
	フジコナカイガラムシ	やや早い	平年並
	チャノキイロアザミウマ	やや早い	平年並
	うどんこ病	やや早い	平年並
チャ	カンザワハダニ	平年並	やや多い
	クワシロカイガラムシ	やや早い	平年並
イチゴ	うどんこ病	平年並	やや多い
ホウレンソウ	べと病	平年並	やや多い
	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
キク	白さび病	平年並	やや多い
	褐斑・黒斑病	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：5/27～6/26）

気温：平年並か高い確率がそれぞれ40% 降水量：平年並か多い確率がそれぞれ40%
日照時間：平年並か少ない確率がそれぞれ40%

○今月の農薬適正使用のポイント

6月1日～9月30日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

1. 農薬散布時の注意事項

- ①農薬散布は、極端な高温、低温時を避け、散布後に葉が濡れた状態が長時間続かないように、散布時間帯や天候、換気等に配慮しましょう。
- ②散布後に葉が乾いてから、残った薬液等による重複散布を行わないようにしましょう。薬害、農薬残留基準値超過の恐れがあります。

2. 水稻の育苗箱施用

水稻の育苗箱施用を行う場合は、十分な薬効を確保するため、以下の点に注意します。

- ①ラベルに書かれた規定の処理量を遵守します。
- ②移植直前に処理する場合は、処理後に軽く散水し、稲体に有効成分を吸収させてから移植します。
- ③移植後はかけ流しを控え、1週間程度止水します。

3. 被覆の必要な土壌くん蒸剤を使用するとき

- ①クロルピクリンなど、被覆の必要な土壌くん蒸剤を使用するときは、処理後の覆土と被覆を直ちに行い、周囲に漏れ出さないよう十分に注意してください。
- ②住宅地などの周辺で使用する場合は、人畜に被害が生じないよう、周辺住民への説明や事前周知を必ず行うなど、被害防止対策を徹底してください。

4. 農薬の適用作物名

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。「トマトとミニトマト」、「ピーマンとシシトウ」、「実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）」とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）、「すいかと漬物用すいか」などは、いずれも農薬登録内容が異なります。このほかにも、判断に迷った場合には各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へお尋ねください。

※農薬に関する情報は、令和5年5月30日現在の登録内容に基づいて記載しています。

I. 普通作物

1. 水 稻

（1）苗立枯病、苗立枯細菌病、苗腐敗症（もみ枯細菌病）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（平坦地域）

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平坦地域の苗床での発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 高温管理等が発病を助長しますので、施設やトンネル育苗では日中の温度管理に特に注意します。
- 2) 育苗は、排水および通気性を確保して、高温管理を避けます。発生した育苗箱は処分または隔離します。

（2）ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は見つけ次第抜き取って処分します。
- 2) 育苗時に多発した場合は、次年度必ず全ての種子を更新します。

（3）いもち病（葉いもち・苗いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 3.1%でした。

- 2) 6月の降水量は平年より多いと予想されており、発生を助長させる恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域では、オリゼメート粒剤を箱施用した場合には6月上旬以降に、フルスロットル箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤等の長期残効型薬剤を処理した場合には7月上旬頃にもち病が初発する可能性がありますので、早期発見と早期防除に努めます。
- 2) 置き苗は伝染源となりますので、必ず早めに裏返して水没させ処分します。

(4) トビイロウンカ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 5月23日時点で、予察灯（桜井市池之内）への誘殺は確認していません。
- 2) 令和元年より梅雨期の多飛来が続いていますので、6月飛来に警戒が必要です。

防除上の注意事項

- 1) トビイロウンカの防除は、効果の高い箱粒剤を処理することが重要です。6月に田植えする水田では、フルスロットル、スクラム、ハコガード、ゼクサロンなど有効成分にトリフルメゾピリムを含むものかアレス箱粒剤、リディア箱粒剤を使用します。これらと同じ有効成分を含む様々な商品名の箱粒剤がありますので、農薬販売店等に相談し、他の病害虫との同時防除も考慮して選びます。
- 2) 梅雨に入ると飛来に警戒が必要です。病害虫防除所ホームページに予察灯への飛来数をアップしていますので、御確認ください。また、飛来が確認された場合は病害虫情報を発表しますので、今後の予察情報に注意してください。

(5) ニカメイガ（第1世代）

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) この数年、発生は認められていません。
- 2) 発蛾最盛期は6月4半旬と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 第1世代の防除適期は、発蛾最盛日から5～7日目の6月5半旬となります。
- 2) 本種は局地的に発生する場合があります。これまで発生しなかったほ場でも、寄生や被害が見られないか株元を中心によく観察します。

(6) イネミズゾウムシ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや少ない**

予報の根拠

- 1) 山間部～中山間部の早植え地域では、成虫の発生ほ場率は29%とやや少ない発生です。

防除上の注意事項

- 1) 箱粒剤を処理していない水田では、成虫が株当たり0.5頭を越える場合は防除を行います。
- 2) 水田内へは主に歩行侵入しますので、発生が水田周縁部に限られる場合には、額縁防除も有効です。

(7) イネクビホソハムシ（イネドロオイムシ）

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫の水田への侵入が始まる時期です。昨年度発生していた地域で、移植時にオリゼメートオンコル粒剤を使用した場合は、6月上旬にトレボン粒剤で防除します。

(8) スクミリングガイ (ジャンボタニシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 令和4年12月から令和5年2月の3ヶ月平均気温は5.4℃と平年並でしたので、越冬量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 水稻が食べられるのは苗が小さい時期であり、4葉期を過ぎると食害リスクは減少します。田植え時から2～3週間後までの対策が重要です。
- 2) 稚苗移植を避け、中・成苗で移植します。
- 3) 苗が食べられるのは水中だけです。田植え後2～3週間は水深4cm以下の浅水管理にします。
- 4) スクミノンなどの薬剤処理は田植え直後に行います。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) カキノヘタムシガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 御所市に設置したフェロモントラップによる誘殺数調査では、成虫発生開始が5月18日(御所市)で、発生盛期は21日頃と推定されます。

防除上の注意事項

- 1) 「富有」の満開10日後が防除時期の目安となることから、防除適期は5月30日～6月1日頃と思われます。ミツバチの巣箱の引き上げ後に防除を実施します。
- 2) 昨年発生が多かった園地では、散布1週間後に再度防除を実施すると効果が高まります。

(2) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、寄生花(果)率が0.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は6月中下旬の若齢幼虫期です。白綿状の卵塊を見かけてから10日後以降に散布むらのないように十分量の薬液を散布します。
- 2) 夏以降はカイガラムシの生育ステージが乱れ、薬剤の効果が現れにくくなりますので、今回の防除で密度を十分に下げておくことが重要です。

(3) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 成虫の発生ピーク予測では北部地域で5月15日、南部地域で5月20日となっています。

防除上の注意事項

- 1) 第2世代の成虫の発生ピークは北部および南部地域で6月中旬と予想されます。
- 2) 昨年度の多発園や被害が目立つ園では2週間おきの防除と、第3世代の成虫ピークである7月上中旬にも追加防除が必要です。

(4) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では新梢の罹病はみられませんでした。前年多発園では枝病斑が確認されています。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期は炭疽病防除にとって最も重要な時期であり、予防散布を徹底します。
- 2) 降雨が続く場合や前年発生園では、10日以上間隔が空かないように、基幹防除に加え殺菌剤の追加散布を行います。
- 3) 発病枝は他の新梢や果実への伝染源になるので、必ず切り取って処分します。
- 4) 枝の軟弱徒長は発生を助長するので、徒長枝の多い園地では肥培管理を見直します。

(5) 円星落葉病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 前年秋期の発生状況から、越冬菌密度はほぼ平年並と考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 6月～7月上旬が主要感染時期となり、予防散布を適切に行います。
- 2) 前年に多発した園地では菌密度が高まっているので、適期防除を徹底します。

(6) うどんこ病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は2.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 若葉上の病斑が目立つ園地では、感染拡大を防ぐため薬剤防除を徹底します。

2. ナ シ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は2.9%でした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期に入り降雨と共に孢子形成が活発になるので、新梢葉の発病状況および気象状況に注意して薬剤散布を行います。
- 2) 薬剤散布は棚上の発育枝葉に薬液が到達するように、十分量を散布します。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は2.9%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発病した葉や幼果は見つけ次第必ず取り除き、園内に残さないよう処分します。
- 2) 梅雨期の降雨により発病が増加します。気象状況に応じた適切な防除を実施します。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布はていねいに行い、散布むらのないようにします。

3. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類

予報内容 発生時期：遅い 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 水銀予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺数は、5月下旬時点で各調査地点0～11頭/日と少ない状況です。
- 2) 5月下旬にサクラ、クワ樹への寄生状況について巡回調査を行った結果、チャバネアオカメムシの寄生平均虫数は(0.3頭/樹)と全体的に少なくなっています。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫は全体的には少ない発生ですが、山際の園地や一部の常発園では突発的な飛び込みには注意が必要です。
- 2) 飛来がない園での予防散布は、天敵の減少によってカイガラムシ類、ハダニ類の増加につながるなど弊害が大きいため控えます。

4. チャ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月第4半旬時点の一番茶葉での発生は平年並です。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 開葉期が防除適期になります。

(2) もち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月第4半旬時点の一番茶葉での発生は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 炭そ病と同時防除を行います。

(3) チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター(奈良市矢田原町)での5月中旬までの誘殺調査では、発生量は平年並、発生時期は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 1～2葉開葉期が防除適期です。
- 2) 摘採間近に巻葉が見られた場合は、早めに摘採します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月中旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月中旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(6) カンザワハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は8.6%でした。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 一番茶期に発生した園地では番茶摘採後の防除を徹底します。
- 2) 被覆茶園での被害が散見されます。二番茶被覆時は被覆前に寄生、被害状況を観察し、発生が認められる場合は早期防除を基本とし、被覆前に防除します。
- 3) 薬剤の感受性が低下するので、年間を通じて同一系統薬剤の連用は避けます。

(7) クワシロカイガラムシ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 発生時期はやや早く、越冬世代成虫の寄生株率は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 平年の防除適期は6月上旬頃です。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) 幼虫のふ化最盛期を把握し、適期に薬剤散布します。卵からふ化した幼虫がロウ物質を出し始めるまでの5日程度が防除適期です。
- 3) 薬液が樹冠下の枝条（株の内部）に十分付着するよう、丁寧に散布します。

(8) チャトゲコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 一番茶期での発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は若齢幼虫期（成虫発生終息後）の6月下旬頃です。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生ほ場率は10%、発病葉率は1.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけ育苗で寒冷紗を被覆した場合には、特に発生しやすいので注意します。
- 2) 梅雨明けまではサンヨール、モレスタン水和剤等による予防散布を行います。サンヨール及びモレスタン水和剤は薬害が出やすいため、雨よけ施設内では散布日を含めて

散布後2～3日以内に30℃以上の高温が予想される場合には使用を控えます。

- 3) 発生初期には、上記薬剤の他、パレード20フロアブル、ラリー乳剤等のDMI剤およびスクレアフロアブル等のQoI剤等を散布します。
- 4) 薬剤散布前には必ず下葉を取り除き、葉の裏側や未展開葉にも薬液が十分かかるように散布します。
- 5) 薬剤散布の3～4日後には葉裏の菌そう（白いかび）を観察し、薬剤の効果を必ず確認します。効果が劣る場合は使用を中止して他剤で早急に追加防除します。

（2）炭疽病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の親株床調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、高温・多湿により発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 育苗床では発生前からの薬剤による定期的な予防に努めます。特に降雨前の防除に重点をおき、予防散布にはアントラコール顆粒水和剤やジマンダイセン水和剤などを行います。
- 2) 発病株や発病ランナーは、見つけ次第周囲の未発病株やランナーと共に除去して周囲に放置せず、密封処分します。その後、直ちに薬剤防除を実施し、以後の発病には特に注意します。
- 3) 多発した場合には、発生部分とその周辺をシートやビニールで密閉し、隔離します。
- 4) 育苗床の雨よけと底面給水や点滴かん水を併用すると、高い防除効果が得られます。

（3）ハダニ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生ほ場率30%、寄生株率5.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) 収穫後の本ぼはハウスを閉め切って蒸し込み、ハダニを殺した後に株を持ち出します。
- 2) イチゴの雨よけ育苗では、露地育苗と比べてハダニが増殖しやすいので、注意が必要です。
- 3) 薬剤のかかりやすい育苗初期は、薬剤抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を中心に防除を行います。
- 4) 抵抗性発達を遅延させるため、同一殺ダニ剤の連用は避けるようにします。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

2. トマト

（1）葉かび病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率12.5%、発病株率1.0%でした。
- 2) 密植、多湿条件で発生しやすく、肥効が切れると発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 葉かび病抵抗性遺伝子Cf-9を保有する品種での発病が確認されています。
- 2) 葉裏の病斑上に胞子が形成されると急速に拡大し防除が困難になるため、発病前にダコニール1000、オーソサイド水和剤等で予防散布に努めます。薬剤が葉の裏面にも十分にかかるように丁寧な散布を心がけます。

- 3) 発病初期には、下葉の罹病葉をすべて摘除し、ほ場から持ち出し処分します。その後1週間間隔で少なくとも2～3回以上、上位葉での発病が止まるまでスコア顆粒水和剤やケンジャフロアブル等で防除します。但し、耐性菌の発生を防ぐため同一系統薬剤の連用は避けます。
- 4) 県内の主要産地ではQ o I 剤、SDHI およびベンゾイミダゾール系薬剤の耐性菌が高頻度で確認されています。同一系統薬剤の連用を避けるとともに、薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(2) アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回では、発生ほ場率29%、白ぶくれ果率1.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) ほ場周辺のクローバー、ヒメジョオン等の雑草に多く集まります。雑草は開花前に除草を徹底します。開花後に除草すると餌を求めてアザミウマがほ場内に移動してくるため、注意します。
- 2) トマト幼果の白ぶくれ症は、開花期の加害による被害です。白い紙の上で花房を叩いて、アザミウマが落ちてくるようであれば防除します。
- 3) 薬剤抵抗性の発達が進んでいます。抵抗性発達を遅延させるために、同じ系統の殺虫剤の連用は避けます。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

3. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率33%、発病株率1.2%でした。
- 2) 今後天候不順が続くと、発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) これまで本病が未発生の抵抗性品種でも、発病する可能性があるので十分注意します。
- 2) 今後も天候不順が続くと発生しやすいため、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル等の薬剤による予防に努めます。
- 3) 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場周辺に放置せず、埋没又は密封処分します。
- 4) 夏期に土壌の太陽熱消毒を行うことで、耐久体である卵胞子密度を下げ、翌作以降の発病を抑制します。

(2) アザミウマ類（ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

**予報内容 発生時期：平年並 発生量：（ネギアザミウマ）やや多い
（ミカンキイロアザミウマ）平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回では、ミカンキイロアザミウマの発生は認めていませんが、ネギアザミウマは発生ほ場率は33%、寄生株率10%でした。

防除上の注意事項

- 1) ネギアザミウマの発生が本格的に増加するのは梅雨明け以降ですが、ほ場周辺にネギ、タマネギ、アスパラガスなどを栽培していると早くから飛来する場合があります。新葉の引きつれ症状が発生していないかよく観察します。
- 2) ミカンキイロアザミウマは、葉裏に多数の幼虫が寄生してシルバリング症状が発生し、多発すると株が萎縮します。アブラムシの被害と似ていますので、防除薬剤の選択を間違えないよう、葉裏をよく観察します。

- 3) ミカンキイロアザミウマは抵抗性発達が顕著です。発生した場合は、ファインセーブフロアブルを葉裏にかかるように丁寧に散布します。また、発生ほ場では連作を避け、収穫後に太陽熱消毒を行います。

4. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、夏にかけて増加期に入りますので、発生の拡大に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの生育期株元灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率100%、発生株率38.4%でした。
- 2) 今後、気温上昇とともに増加するため、定期的に防除を行います。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの株元灌注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合はスピノエース顆粒水和剤、アドマイヤーフロアブル、ファインセーブフロアブル、プレオフロアブルなどを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) 抵抗性の発進が進んでいますので、同一系統薬剤の連用は控えます。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林(農業)振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

5. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40%、発病株率24%でした。
- 2) 今後天候不順により発生がさらに拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 2) 罹病性の品種では、今後の天候次第で上位葉での発生が懸念されます。降雨前に丁寧に薬剤散布を行います。発生初期には下葉の罹病葉を除去後、オペラフラワー乳剤、

アンビルフロアブル、ラリー乳剤、カナメフロアブル、ハチハチ乳剤等で防除します。
ただし、薬剤耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用は避けます。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 40%、発病株率 1.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生前にはダコニール 1000 等で防除します。

(3) アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回では、クロゲハナアザミウマの発生は認めていませんが、ミカンキイロアザミウマは発生ほ場率 60%、発生株率 3.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) ミカンキイロアザミウマは、収穫適期を過ぎた放置株が温床となりますので、直ちに処分します。また、生育期には新芽部、着蕾期以降は花蕾に集まりますので、白い紙の上に払い落として発生の有無を確認します。
- 2) ミカンキイロアザミウマは薬剤抵抗性の発達が顕著ですので、同一系統薬剤の連用を避けます。抵抗性発達状況は地域によって異なりますので、薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所にご相談ください。
- 3) クロゲハナアザミウマは葉裏に成幼虫が寄生します。ハダニの被害と間違えやすいので、防除薬剤の選択を間違えないよう、葉裏をよく観察します。

6. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類（野菜類、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と平均寄生株率はそれぞれ、イチゴ育苗では 30%と 1.6%、ホウレンソウでは 17%と 0.3%、夏秋ナスでは 71%と 3.7%、キクでは 10%と 0.4%、ネギ、トマトでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) モモアカアブラムシやワタアブラムシは薬剤抵抗性の発達が認められています。特にワタアブラムシはネオニコチノイド系剤に抵抗性の個体群が確認されています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所へご相談ください。
- 2) 露地ナスでは土着天敵に影響の小さいウララDF等を使用します。

(2) ハダニ類（ナス、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査での発生ほ場率と平均寄生株率はそれぞれ、夏秋ナスでは 29%と 2.0%、キクでは 20%と 4.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 露地ナスでは主にカンザワハダニが発生します。土着天敵に影響の小さいマイトコー

ネフロアブル、ダニサラバフロアブルを使用します。

- 2) キクでは主にナミハダニが発生します。抵抗性の発達が著しいので同一系統薬剤の連用は避けます。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

(5) コナジラミ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回での発生ほ場率は、トマトでは14%、イチゴ育苗で10%でした。夏秋ナスでは発生は認めていません。

防除上の注意事項

- 1) オンシツコナジラミとタバココナジラミは、いずれも抵抗性が発達している上に、有効薬剤が種によって異なります。発生種を確認して防除薬剤を選択してください。
- 2) 主に下葉に幼虫が寄生しますので、下葉のかき取りをまめに実施することで増加しにくくなります。
- 3) 薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農薬情報システム（農作物病害虫・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>